

【優秀賞】

タイトル：本当に望んでいること

生徒氏名：M・S

日本の法律で「基本的人権の尊重」とありますが、そのことについて障害のある私の友人から感じたことについて書きたいと思います。

私が通っていた小学校には、肢体不自由児学級があります。私は、そのクラスに在籍している人と友達になりました。

彼は、生まれつき両脚が不自由で、自分の力で歩くことができません。そのため、車椅子や歩行器を使って生活していました。

彼は学校での活動で、算数や国語など障害があっても差し障りのない授業の時には普通学級で過ごし、そのクラスの一人として過ごしていました。さらに、脚が不自由でも彼のできる範囲で、学習発表会や運動会などの行事、クラブ活動、委員会にも参加していました。

私は彼と友達になってから、とても残念な状態を見てきました。

それは、よく彼の脚のことに対して「気持ち悪い」などと言っているのを耳にしたことです。学習発表会の練習の時に、彼の演技を見てばかにしたように笑っている人もいました。また、ある時私は彼が泣きながら保健の先生に何かを相談しているところを見ました。翌日、担任の先生から彼は脚が不自由である事を何度も笑われて悲しんでいたという内容のお話がありました。

障害があるということを実際を笑ったりばかにしたりすることなど、考えてもみなかったことを実際に目の当たりにしてとても驚きました。それと同時に憤りを感じました。

しかし、私は彼と友達になって障害のある人と一緒に行事ができることも学びました。

運動会の数ある種目のうち、組体操がありました。次々とポーズを変えていくのですが、その合図に彼が太鼓を叩くという形で参加しました。また、六年生になって私が委員会の委員長になったとき、彼も他の委員会の委員長となり、お互いに学校行事の指揮を執って頑張りました。

彼は、学校のサポートによって様々な活動に参加しています。このようなシステムは社会的にも高く評価されると思います。また参加できる障害のある人たちも、こういう場がたくさんあると嬉しいと思います。しかし、時にはゲームに参加してグループの一人として他のグループと競争したり、たくさんの人手があってやっと参加できるようなことは、他の人に迷惑がかかるので彼は嫌だと言っていました。みんなが口にしなくても、障

害のある人がグループにいたせいでゲームに負けたと思う人もいます。そういった雰囲気や常態を彼は感じ取っていたのではないかと思います。

また、私は彼と接していて、いろいろなことを手伝うことがありました。車椅子を押したり、歩行器を運んだりしました。学習用具をとってきたりもしました。これらのように障害のある人を手伝うことは少しも面倒でも難しくもないし、実際に介護をしなくては、生活が成り立たなくなってしまう。

しかし、彼は「人に迷惑をかけるのが辛い。」と時々言っていましたし、人の役に立つことを望んでいました。私は、彼に対して勝手に「できないだろう」と思い、手伝いをし過ぎて肢体不自由児学級の先生に止められたことがあります。今思えば、彼に対してとても失礼なことをしてしまいました。

彼は、私がつまらない思いをしていた時に相談に乗ってくれたり、励ましてくれたりしました。私も、彼に助けられることがあるのです。私はそのことに早く気づき、彼を一人の人間として認め、「助け合う」という精神を持つべきだったのです。

このように障害があってもなくても、一方的に助けるのではなく支え合い協力することは、人権を尊重することだと思います。

障害者を「手伝ってあげる」「行事に参加させてあげる」という考えは、時に彼らをさげすんだ立場に追いやってしまいます。

人間は、障害があっても無くても、考え方が違うので同じ行動でも人によって受け取り方が違います。そのため、相手に良かれと思って行動しても、喜ぶ人もいれば余計だと思ってしまう人もいます。健常者同士でも理解し合えない事があります。そういう時は相手の立場を考えたり意見を聞いたりします。それと同じように障害のある人ともよく話し合い、希望をきいてより良い方法を見つけることが大切です。

このように、相手の気持ちを考えることはお互いの人権を守ることの第一歩になると考えられます。すると障害のある人は同情ではなく本当に社会に役に立つことが、人間として生きることが出来ます。これが人権を尊重するという事だと思います。